仕事師

清水一行

仕事師

定価　二九〇円

昭和42年8月10日発行

著者　清水一行

発行者　徳間康快

印刷　ナガナエ原色印刷

製本　高木紙工

発行所　徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話　代表　四三四・六一九一

乱丁・落丁はおとりかえいたします

一九六七©検印廃止

仕事師

清水一行

徳間書店

目次

仕事師……5
裏街道の主役……37
黒い社会（ブラック・ソサエティ）……73
禁忌（きんき）の渦（うず）……109
羊の城……151
腐肉をむさぼる男……175
処女膜再生……215

装幀　秋野卓美
さし絵　辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

仕事師

戦闘開始

私はあくまでも、傍観者の立場にある。

有力な高利貸しの銭村宏造が、なにかの弾みで私に言った。

「芝木さん、この社会で一億円くらいの金なら、造作もなく稼げるんですよ」

一億円といったら、私達の常識では大金だ。大金というより、ちょっと想像もできない紙幣の量である。そこで、私は冷やかし半分に、「ならば見せてくれますか」と言うと、「よし見せましょう」ということになった。

「いったい、なにをやるつもりなんです」

「一発屋です」

「一発屋?……それで一億円稼げますか」

「三十日間あれば充分」

銭村は、白い能面のような顔で答えた。ともかくこうして、一億円を稼ぐという、私への示威犯罪が開始された。

十一月上旬。砂ぼこりを舞い立てるからっ風の吹く日だった。外出先から新宿興信所へ帰った私に、事務員が一通のメモを渡した。銭村からである。

《本日午後二時、お茶の水の都商事へお越し願いたい》

はじまったな、と私は思った。そこで、大急ぎで昼食をとり、依頼された結婚用身許調査の報告レポートをまとめると、新宿からタクシーでお茶の水に向かった。

都商事というのは、銭村が東京都内に張りめぐらしている金融網の一つで、銭村直系の城中雄二が、名義上の社長になっていた。城中とは何度も会っていて面識がある。

しかし都商事に着いて、一歩中にはいると、私は部屋を間違えたのではないかと思った。室内がつい四、五日前とは一変、ガタガタな中古机が、お揃いのスチール製事務机に取り替えられており、いままではいなかったはずの女子事務員が、二人も席につき、落ち着きはらった態度で帳簿をくり、ソロバンを弾いていたからである。よく見ると、二人とも日本橋の銭村の事務所の社員である。どうやら派遣されたらしい。

「カーテンから応接セットまで新調ですか」

私はそう言いながら、ソファーに腰をおろした。すると城中が「いけません」と、厳しい顔

で注意した。

「それはお客様用です。今日から一カ月間、芝木さんは都商事の社員なんです。この事務所にいる間は、私の前の事務机に坐り、きちんと仕事をしていて下さい」

なるほど私用の机が用意されていた。

やがて城中は、オーバーを着て部屋を出ていった。都商事で、城中の相方をしている橋本文男という三十年輩の男が、「私は城中さんの秘書、あなたは都商事の会計係、いいですね」と私に念を押した。

ともかくお膳立てが大変である。人を騙すには、やはりこれくらいの準備が必要なんだなと感心している間もなく、ドアがノックされた。素早く、俄仕立ての都商事女子社員が戸を開ける。入ってきたのは、私と年恰好の似通った、四十年輩の実直そうな男だった。

「いま社長は留守だから、こっちへきなさいよ」

橋本は客をソファーに導いた。

——もうはじまった。

ありふれたスタートである。なにも知らなかったら、この瞬間から、一発屋と称するなにかがはじまったなどとは思えなかった。私は神妙に机の帳簿をくっていた。帳簿といっても、どこか屑屋の仕切場からでも買ってきたものらしい代物で、都商事とはまったく関係のない数字

が、びっしりと並んでいる。
「だいじょうぶですか、買ってくれますかね」
客が不安そうに橋本に聞いた。
「うまく取り次ぐよ。だけど手数料の割戻しは間違いなく頼むぜ」
「それは営業部長の諒解をとりました。手数料の二割……」
二人は声を落とし、額を突きあわせるようにして、売買の都度払ってくれとか、四、五回まとまってからにしてもらいたいとか言いあっていた。やがて、出ていったばかりの城中雄二が帰ってきた。客は席を立つ。橋本が城中の背後にまわり、オーバーを脱がせてやると、城中は尊大に社長席に坐った。
「社長、こないだ話しました山塚証券のセールスマンがきているんですが……」
城中は顎を突き出すようにして客を見た。
セールスマンは恐る恐る名刺を抜き、城中の机に置く。
「橋本さんとは、昔、知りあいだった者で、吉田と申します」
「駄目だよ株なんて。株なんか儲からないにきまってるじゃないか」
名刺を突き返すような見幕で、城中が言った。セールスマンは慌てて橋本を見る。
橋本が、心得顔で口をはさんだ。

「社長、こないだも話しましたように、株は買い時期さえ間違えなければ儲かるんです。いまが底値だということは、これはもう絶対に間違いありません」

「神様じゃあるまいし、そんなことがわかるもんか。うちにも、損をしている株がうんとあるじゃないか」

「それは高い時に買ったから損をしたので、いまならまず損をすることはありません」

「君は、ばかに株屋の肩を持つね」

「そんなわけではありません。金融緩和でお金があいている時だから、ただ遊ばせておくのももったいないと思いまして。それに例の大証事件以来、手形はさっぱりですからね」

すると電話がかかってきた。女子社員が応対し、「社長、関東銀行からお電話で、日本興業から間違いなく六百万円の振込みがあったそうです」と告げる。

するとまた電話で、こんどは集金にきてくれという伝言。そこへ銭村のお抱え運転手がおずおず入ってきて、「ハイヤー代の請求にまいりました」と告げる。城中は鷹揚にうなずいて小切手を切った。

私にはどこまでが芝居で、どこまでが本当なのかわからなくなってきた。しかし電話もハイヤーの集金も、明らかにサクラである。

株にたいする押し問答がつづき、やがて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「橋本がそんなにすすめるなら、おつきあいに買おう。しかし損はしたくないからな。安全な利回り株でなければ駄目だぜ。なにがいいの」
と、城中はセールスマンに聞いた。
「安全な利回りを狙うんでしたら鉄鋼株を」
「鉄ならいいだろう。下がっても知れている」
「じゃ富士鉄なんかいかがでしょう」
「まあ二、三万株というところだね。初めてだし、おたくのこともよくわからないんだから。ところで橋本君、支払いはどうする」
「四日後でいいのです」
「そうだったな。小切手でいいんだろう」
「いえ、株の決済は、絶対に現金でなければいけないきまりです」
「わかったわかった。あとはうまく打ち合わせてくれ」
城中は客に背を向けた。橋本は、今日の大引け値段で富士鉄を三万株、とりあえず買ってくれとセールスマンに注文を出した。

一億四千万円

「こんなもんだな」

セールスマンが帰ると、城中は背伸びをしながら橋本を振り向く。

「うまいもんですよ」

橋本もやれやれといった顔つきで、私に笑いかけた。

――これで一億円儲かるのだろうか。

私は富士製鉄三万株という注文を聞いたとき、ふっと疑問に感じた。六十円の株を三万株買っても、ただの百八十万円だ。一億円にははるかに及ばない。

すると、橋本が電話をとった。

「第二証券さんか。富士鉄を大引けで三万売っといてくれ」

私は帰り仕度をはじめた。すると城中が、

「明日から毎日ですよ」

と、念を押した。

「証券会社は四軒使います。橋本君、明日は大手の証券会社だったな」

「東京証券神田支店。ですから松下かトヨタを二万株ですね」
「わかった」
城中はわかったと言ったが、私にはわからなかった。四つの証券会社を使って、毎日株を買い、買った株を右から左へ売却してしまう……。それで最後はどう展開するのだろうか。
翌日から三日間は、まったくおなじ場面の繰返しだった。ただ違うのは、相手の証券会社と、買う銘柄だけのことである。
〃手数料の割戻しは出すか〃 〃株はいまが底値だ〃 〃おつきあいに二万株も買いましょう〃
――そしてセールスマンが帰った後での売り注文……。
しかし四日目に、ようやく変化がでてきた。
山塚証券の吉田が、三万株の富士製鉄株の受渡しに訪ねてきた。彼は、
「営業部長が御挨拶したいと申しておりますので」
と城中に言ってから、部屋の外に声をかける。入ってきた男はセールスマンの吉田よりも少し若そうだったが、目つきの鋭い、なかなかのやり手に見えた。営業部長は、「山塚証券は信用第一をモットーにしております」と、くどい挨拶をした。
「営業部長さんじきじきの御出馬じゃ、今日もまた、なにか買わされそうだね」
城中が誘うような冗談を言う。

「鉄鋼株もよろしいのですが、動きの軽い仕手株などどうでしょう」
営業部長が気を引いた。すると城中はむっとしたように、
「われわれ素人は、仕手株になんか手を出しちゃいかん。一度買ったら長く持ってるんだから、堅実な優良株でなければ、どうなるかわからんじゃないの」
と、逆に営業部長をたしなめた。
「やっぱり松下のようなものがいいですな」
秘書の橋本がとりなす。
「ちょうど小口の返済があったから、松下を三万ほど買ってもいいぜ」
城中雄二の言葉に、山塚証券の二人は最敬礼をした。
そのとき女子社員が外から帰ってきて、封筒の中身を、小さな手下げ金庫にいれる。
「銀行から金が着いたので、受渡しをしましょう」
と橋本が言い、買い代金に手数料を加えた百九十一万円が支払われた。
受渡しがすむと、城中と橋本は、「これから出かけるので」と言って、山塚証券の二人を追い立てるようにして帰し、女子社員が、受け取ったばかりの富士鉄三万株を持って出ていった。
「どうするんです」
私は城中にたずねた。

「近くの喫茶店に、第二証券の者が待っているんでね」
「それで？……」
「つまり山塚で買った株を、第二で売るんですよ。第二が持ってきた金は山塚に払い、株券は第二証券に渡すんです。右から左に金と株券を動かすだけですな」
「じゃ手数料分ずつ損になるじゃないですか」
「その分は銭村さんからあらかじめ貰って用意してある。そういう目減り資金は、一億円の仕事をやろうと思ったら、一千万円はかかるものなんです」
ともかく、激しい回転がはじまったらしいことは、私にもわかった。この回転のあいだに、巧妙なカラクリが仕組まれるにちがいない。やっと、私は興味を抱きはじめた。
翌日は大手の東京証券神田支店の受渡しだった。こちらはトヨタ二万株である。現金を払う前に、新しい買い注文が出される。銘柄はおなじトヨタ自動車だったが、株数が三万株に増えた。
その日、帰りに私は、日本橋の銭村宏造の事務所に寄った。
銭村は、めったに感情というものを表にあらわさない。いつも細い目で、静かになにかを考えていた。痩身の銭村が、白い顔でじっと瞑想している姿は、不気味でさえあった。
「どうです、わかってきましたか」

「株数が、日毎に増えてゆきますね」

「そう。最後には一億三〜四千万円分になる」

一億三〜四千万円……。仮に二百七十円のトヨタ自動車を買ったとして、五十二万株である。大変な株数だ。

「だから優良株を買うのです。品薄の変な株を買ったら、一挙に五十二万株は売れませんからね。それと、一軒の店で五十二万株買うのも問題です。なぜかというと、一軒の証券会社で、一億円以上も引っかかったら、死にもの狂いで立ち向かってきます」

と銭村。ともかく、四軒の証券会社に分けて、一億四千万円の株を買うのだということはわかった。最後に銭村は、

「いま国定忠治を探しているんですよ」

と意味あり気に笑った。

送り狼

私と銭村宏造の出会いは、三年前である。私が新橋のある探偵社から独立し、新宿に身上調査中心の興信所を開いた直後だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb